

丸山幸彦著

『古代東大寺庄園の研究』

西別府 元日

日本の古代史研究は、既存の研究体系から脱却して、地域の視座にたった古代地域史研究の方法を鍛え、その可能性を切り開いていく主体性を有しているのかという問いかけに対し、肯定的な解答をだす基盤となる、具体的かつ力強い研究成果をまたひとつ獲得することができた。それは、丸山幸彦氏の新著『古代東大寺庄園の研究』である。

本書は、氏が一九六七年以来公表されてきた一七本の論文に新稿を加え、東大寺領を素材に「八世紀から一〇世紀に至る王臣家・寺社などの大土地所有の巨視的な流れを」明らかにするという視角から、四部一章・余論に再構成された大部の労作である。各章末には、懇切丁寧なまとめが付されているので、ここでは、筆者の問題関心に従った簡単な概要と若干の感想を述べ、

日ごろ著者の学恩に浴している後学の務めをはたしたい。

序論では、東大寺莊園を地域別・時系列別に整理し、「第一部 北陸における東大寺莊園群の展開」「第二部 畿内・中国地域における東大寺莊園群」「第三部 阿波国新島庄の成立とその変遷」「第四部 一〇世紀の東大寺莊園」の四部に編成された意図が、各章の論点を簡潔に整理しながら述べられており、本書を読むうえでの水先案内的論述となっている。

古代東大寺領莊園は、天平感宝（勝宝）元年四月詔にもとづいて占点地、立券が行われたが、東大寺による占点地・開発・経営と、地域における既存の開発・農業経営との関係を考察されたのが第一部の三章である。第一章「越前・越中・伊賀における東大寺莊園の展開」では、東大寺による天平神護年間の寺田回復運動関係の史料を中心に、占点地以前の在地の開発状況を認識され、越前・越中・伊賀では、既存の開発や点地・獲得方式に相違があり、それが地域農民との矛盾・確執、回復運動の方向を規定したとされている。

土地占点による矛盾の形成は、第二章

「越前平野の村と道守庄」でより具体的に考察される。この章では中国雲南省僚族の事例をもとに、生活の基礎単位をこえた豪族・農民の「入混り」的な開発田地群としての「村」の形成を想定され、「村」を含みこむ形で占点が実施されたため、東大寺と「村」との間に矛盾・確執が生じたことされる。かくして成立した莊の経営を考察されたのが第三章「越前諸莊園の経営」である。莊園経営の基本史料とされてきた「桑原庄券」には、開発・経営における農民の組織化は直接反映されていないこと、諸莊園は営稲とみなしうる大量の莊内留保稲によって実態化されていることなどから、越前における莊経営を営田経営の一形態と考えるべきだとされている。

以上、第一部は初期莊園の典型とされる北陸莊園群の分析であるが、これは「特定の時点の特定の地域のあり方にのみ限定して」その特質を論じてきた従来の研究を止揚し、北陸莊園を相対化して、より多面的に莊園を把握するための基礎作業である。著者の古代莊園論は、第二部・第三部ににおける畿内・中国・四国の莊・莊所分析とあいまって、一層その学問的価値をたかめて

いくことになる。とくに、山崎所・水無瀬莊のように、小規模な交通・運輸の拠点としての点地と、その後背機能を担う大規模な点地のワンセットでの莊・莊所設定を中心に、畿内における莊・莊所が東市莊などを核に機能的に連結されていたことを論じられた第二部第一章「天平勝宝八年六月勅施入庄・所群の性格と機能」「現地の景観」の中で、因幡国高庭莊の復元から、その占点地が水上交通・陸上交通の要衝であり、それはさらに瀬戸内海から畿内の莊所に連接することを論じられた第二部第二章「水上交通路沿いの東大寺莊園」は、第三部とともに、東大寺を中心とした西日本における交通・物流体系の構築への志向性の存在を論じられたものである。この体系の中で、赤穂大津での塩生産とその搬出の様相を論じられたのが第三章「山野河海の世界における東大寺莊園と村里刀禰」である。東大寺による在地刀禰との協調的経営が、八世紀後半以後に問題化する王臣家・寺社の山野河海占定の一例ともいえる大伴氏の塩山設定を排除しえたことや、政府の「民要地」論理の形成が論じられ、第四部の内容的伏線となっている。

第三部は、その対象が著者の日常生活の場であるだけに、一層地域の景観にそくしながら、文献にみえる歴史事象が復元的に追究されている。第一章「大河川下流域における開発と交易の進展」では、新島荘は絵図にみえる枚方地区と荘券に記される本庄地区という耕地開墾を目的とした地区と、交通・運輸の拠点たるべく水上・陸上交通の要衝に占地された大豆処地区から構成されていたこと、吉野川河口低湿地にある三地区の抜本的改修を行う必要から、河内・摂津などの先進的な堤防・治水技術の導入が志向されたことが論じられている。

第二章「水上交通路としての南海道支道と東大寺庄園」では、阿波国北部を対象とした大豆処に対し、阿波国南部で同様の機能を期待して新島荘勝浦郡地が占地されたことが論じられる。勝浦郡地は、平城宮跡出土木簡にみえる「武芸駅」「薩麻駅」や「阿波国風土記逸文」にみえる牟夜戸・中湖・奥湖の三津から構成される水上交通路としての南海道支道のうち、中湖に設置された荘地とされる。

しかし、新島荘は、ほどなく東大寺・荘長の掌握をはなれ荘地の耕地のあり方も大

きく変化した。これをうけた承和年間における枚方地区の荘地回復運動を論じられたのが第三章「九世紀における低湿地開発の進展と庄園返還運動」である。この変化は、在地における堤防築造技術の着実な向上が背景にあり、八世紀後半以降全国的に顕在化する「人間の山野河海における生業活動の活発化」の実態的表現であったため、東大寺の返還交渉は難航したとされる。こうした動向への対応が、東大寺など寺社・王臣家の九世紀以降の課題の一つとなり、第四部で論じられる大土地占点地問題の導入とされている。

著者の研究上の柱は、初期荘園論にとどまらず、その衰退の中で、中世荘園がどのように登場してくるのかを視野に入れられている点にある。第四部は、中世荘園の類型が形成されてくる時代的背景を論じられた第一章「延喜庄園整理令と庄園」、その具体的な展開を考察された第二章「板蠅柚の形成と展開」から構成されている。第一章では、延喜庄園整理令を、「生産活動の活発化」に対応した寺社・王臣家の大規模占定ならびにその「所領」化に対する法的規制の総括ととらえ、これに対する寺社

などの占点地の「官省符庄」化や荘域内新規開発田の荘田化などの諸要求が十世紀以降活発化することを指摘される。

第二章では、名張盆地周辺の習俗の相違などから、平野・山・中間地帯の三つの世界の形成とこれを領導する在地刀禰集団の存在を指摘され、彼らが寺社などの動向を規制していたこと、したがって東大寺は、併合した焼原柚を含めての「官省符庄」化を追求したとされる。この地域農民層の動向を具体的に考察されたのが、余論「篠山盆地における大山庄」である。ここでは盆地内の有力農民が、地域の交易・物流の拠点である大山・宮田・篠山三河川合流地区（余部郷）において交通・運輸・交易活動を営みつつ郷刀禰として東寺と結合する一方、本貫の平野部では国衙掌握下の「堪百姓」として営田活動を行い、時には国衙と抗争し、あるいは自らの私宅を荘家として周辺の農民を組織しながら東寺と請負開墾・経営の関係を結び、荘域内開発の実働的存在となっていたとされる。

以上が筆者なりにとらえた、本書の展開である。誤読・曲解がないことを祈るが、もはや与えられた紙数も超過してしまっ

た。各章における疑問や質問はさておいて、最後に全体にかかわる二、三の感想から、我々後学に与えられた課題を確認しておきたい。

二〇世紀中葉に形成された初期荘園の概念は、著者をはじめ多くの研究者によって、数々の見直しが進められてきた。とりわけ大土地経営という見方に対して、交通・物流の拠点的功能に着目する視点の登場は有意義であった。そうした視点からみた場合、第一部においては北陸の荘がもつ交通・物流の機能についての言及が希薄なことが気になった。すでに三国湊や桑原駅、荘物資の移動などに関する先学の指摘もあり、地域の視座にたったアプローチの必要性を感じた。また、「荘園」の衰退を論じられた第三部第三章では、耕地の掌握という観点から分析されているが、その場合、交通・物流の機能がともに衰退するの否か。さらに「生産活動の活発化」に対応した大規模占点地の進展の中で、八世紀の荘・荘所は従来の機能を維持しえたのだろうか。読後にわいてくる課題は、数多い。

「荘園」概念の見直しという点では、「庄域」「庄境」などの記載の際、その内部は未

開墾地なのか既墾地なのか、あるいは寺田のみなのか治田さらには口分田なども含むのかなど、その度に確認する煩雑さが気になった。このような煩雑な確認を必要とする概念が、古代の荘・荘所の分析にはたして有効なのであるか。著者も新島荘が四地区からなり、桑原荘が複数の経営体から構成されていた可能性を指摘されているが、史料にみえる「庄所田」「庄地」などの表記を、「庄」に課せられた機能（もちろん農業生産物の獲得という機能があつても問題ない）を具現・維持せしめるために、「庄」が管理する経済的単位（面的広がり固執せず）として、新たに概念化していく必要性を痛感している。

最後に確認したいことは、地域の視座の有効性である。著者の「文献史料にみえる事実を地域の景観の中で復元する」観点からの分析や、新島荘や板蛭岫に関する地域の研究者の成果にもとづいた史料の読み直し、従来の研究方法や発想に大きな転換をもたらし、さらなる前進の起点となっていることを銘記すべきである。地域社会の中で、地域の情報総体を駆使して考察された研究成果が、正当に検証されるべきこと、

個々の研究者もまたそのような視座を持ち続けるべきであることを痛感しながら、擲筆することとしたい。

（にしべつぷ・もとか 広島大学大学院文学研究科助教授）

（A5判、六一七ページ、二二〇〇円、溪水社、二〇〇一・二刊）